



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芒亭放言
Author(s)	芒亭
Description	出典：各務時報 36号 昭和 4年 5月 25日、各務時報 37号 昭和 4年 6月 25日、各務時報 38号 昭和 4年 9月 25日、各務時報 39号 昭和 4年 11月 25日。
Citation	各務時報
Issue Date	1929-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77640
Type	article
File Information	A008_1936-52S4-S6_Part1.pdf



芒亭放言

此文けの仕事をするれば人生の任務が終ると云ふ様な仕事はない様である。少くとも早く一生を終りたい爲にそんな仕事を早くかたづけたいと思ふ人は先づあるまい。人生は事務ではない過程であるからである。何かある目的の爲に生きて居るのではなく只生きる爲に生きて居るのである。だからほんたうに偉大な人と云ふのは偉大な事を成し遂げた人ではなく、寧ろ一步一步の足どりが優れて居た人であらう。俳聖芭蕉は其臨終に絶句を弟子にもとめられた時、從來詠んだのは皆絶句だつたと答へたさうである。死に臨んだ時の眞剣さを一生つづけて來たのである。

將來の夢に現在を禁化す人がある、公の名に自己をいつはる人がある。生命の斷絶が歸つて居るのだ。

卷頭の言

埋み火を火箸の先であせりながら、物思ふ風情は日本人のみしか味はい得ないだらう。秋の夜長に火鉢に向つて思ふともなく思ひに耽つて居る時に、私共はほんとの自分の王國に歸つて居る様な落ちついた氣持ちになる。よくても悪しくてもそこは自分の獨立國だ。他所に出て木の切れはしの様に取り扱はれる男でも自我の王城に歸つては嚴然たる王者である。だが私等は自分の魂の王國が全然外界より封鎖されて居る事に氣づくであらう何者の間人も許さないと云ふ安泰さを感じると共に、又一方に於いて天涯の一孤客だと云ふさびしさをも感じない譯には行かぬ。人は所詮一人一人の行者である。私等がほんとに信實な氣持から他の人々に話しかけたい氣持や、人間愛と云ふ様な氣持は、此孤獨のさびしさから湧いて來るのではないだらうか。又人に對して信實に謙遜な氣持は人は誰れでも自分と同じ様に、一國の王者であると云ふ事を深く認めるからではあるまいか。

秋の夜の埋み火は、自分の王國の山川を望み見るによい筈だ。(芒亭)



卷頭の言

青葉が繁つて空の色が日増しに濃くなつて行く。太陽の光はきらついて來た。すっかり夏の装ひが出来上つて居る。もうまもなく休暇である。

休暇が學窓に在る者にとつて此上もなく楽しいのは、一つには單調な生活のリズムの軽い亂れがうれしいからでもあるが、故郷の自然と人生とに久し振りに接することが出来るからである。

故郷に久し振りに歸ると、そこに自分の古い過去が大事に保存されてある。だが私等が其時一番多く想ふのは自分の將來である。自分を期待し信頼し激勵する人々の一團をそこに久し振りに見出すからである。

文明人程故郷を持たないと云ふ。刹那的な享樂を追つてデヤズを聞いて居る様に一生の時を消して行く。過去と未來がないからであらう。私等には其は哀しい事だ。(芒亭)

卷頭の言

過日本校講堂に於て新渡戸博士の講演があつた。博士の含蓄の多い話は大きな足跡を本校に残した事と思ふ。

博士は典型的なコスモポリタンである。其思想、其公の生活、其學問上の態度、其家庭生活、往々としてコスモポリタンの香のしないものはない。人が狭い地面に垣根を繞らし各々自分の領域を堅め合つて居るところを、私はかつて小高い岡の上から俯瞰して何だか滑稽に思つた事がある。そして娑婆だと云ふ感じがつくづくした。人を見れば泥棒と思つて居る人達の睨合つて居る所と思へたからである。

私等の地上に争闘と猜疑と虚偽の絶えないのは、かの好智と強力によつて自己の私益を得ん事をのみ目的とする大小様々の偏狭な黨派主義、郷土主義がある爲である。民族的にも個人的にも眞の個性の發揮はコスモポリタンの心界からのみ生れ出るであらう。

出来上つた佛者や哲學者や詩人や科學者の心は同時にコスモポリタンの心でもある。(芒亭)

